

ポーランド語テキストにおける日本関連 事象・地名・人名の格変化について

渡辺 克義

はじめに

拙文の筆者はかつて、我国の地名や邦人の姓名の格変化がポーランド語テキストではいかに扱われるべきかについて粗い考察を示したことがある（渡辺 1992: 14-15, 112-116）。本稿の目的は、実際のポーランド語テキストをもとにこの問題を精緻化することにある。

そもそもポーランドの地名・人名の格変化からして論争的であり（Kreja 1995; Kurzowa 1966, 1967; Manczak 1967; Markowski 1972a, 1972b, 1972c; Obrębska-Jablńska 1958; Skudrzykowa 1996; Szafran 1930; Szymczak 1980; Zarebina 1967, etc.），外国の地名・人名に至っては規範の提示すら満足にできていないのが現状である。個別言語を問題にした論考は、管見では Grybosiowa (1978), Mroczo (1958) など数点しかない。我々がポーランド語で日本に言及しようとする際、直ちに問題になるのが固有名詞の格変化であるだけに、本稿がその方面での参考に供することができればと思う。

日本関連事象・地名・人名はその実際の発音はともかくとして、ローマ字による転写表記では -a (-a), -i (-i), -u (-u), -e (-e), -o (-o), -n の6通りの終わり方しかない。本稿ではこれらを -a 型, -i 型 … と分類・表記する。また、引用文で問題とする箇所には下線を施すとともに、その直後に原則として (主), (生) のように最初の一字をもって格を表示する。

日本関連の表記にあたっては今日ヘボン式が一般的ではあるが、一部にポーランド語式転写表記をしているものもある。また、長音記号を施してあるものとそうでないものがある。単行本などでははじめにヘボン式表記について簡単な解説を施しているものがあるが、これなどは妥当な処置であろう。雑誌記事のような場合でも、Hayama [wym. Hajama] のように発音を記せば、大方のポーランド人にとって親切なテキストとなろう。

1. 日本関連事象

一般のポーランド語辞典でも judo (または dzudo), karate, kimono などは記載されており、kimono は格変化もする。しかし、これらは例外と云ってよく、日本語がポーランド語に及ぼした影響は微々たるもので、印欧語のそれとは較ぶべくもない。

外来語辞典を用いてポーランド語の語彙における日本語の位置を知ることは無意味ではなかろうが、それらの語は平均的ポーランド人の語彙範疇にないものがほとんどである。

Kotanski (1947) は、外来語辞典に記載されている日本語起源の語彙を分析し、その取捨選択が恣意的であることを指摘している。

以下、日本関連事象がポーランド語テキストに現れる実例を見てみたい。

- (1) Składanie w kaidzuka (前) resztek spożytych zwierząt...
- (2) ...; eleganckie Japonki mają po kilka zori (生), odpowiednio do ki-mona.
- (3) Pozostali przy życiu daimio (主) musieli złożyć...
- (4) ... wkrótce jednak dabi (主) stało się niezwykle popularne...
- (5) Hegemonia rodu Hōjō ustaliła się w okresie sprawowania urzędu przez Yoshitokiego, a ostateczny kształt przybrała pod rządami następnego shikken (生) Yasutokiego...
- (6) Od tego czasu wszelkie role w teatrze kabuki grają mężczyźni. (...) poza tym kabuki (主) także uczynił próbę...

日本関連事象をテキストに取り上げる場合には、それがいかなるものであるかの説明がまず不可欠である。語は一般に不変化であるが(1)~(4)、ポーランド語の格変化に容易になじみ、かつそれが人を表す場合には格変化が適用されることもある(5)。文法性は人に関連した語彙にあっては自然性に合わせるが(3)、その他の場合は中性扱いが普通である(4)。(6)は teatr kabuki の teatr を省略したものと考えられるであろう。日本関連語彙はイタリック表記になっているものが多いが、単行本などで索引が充実していれば、普通の表記でも大きな障害とはならないであろう。

2. 地名

ポーランド人に比較的良好に知られている外国の地名については、発音・綴字共にポーランド語化されているものが多い。日本の地名でこうしたものには、Fudzi-jama, Hirosima (または Hiroszima), Honsiu, Jokohama, Kioto, Kiusiu, Sikoku, Tokio などがある¹⁾。

地名の文法性は、-a 型は女性、その他は中性になる²⁾。Ateny (アテネ), Helsinki (ヘルシンキ), Saloniki (サロニカ) のように複数名詞扱いにしたり, Gorki (ゴークキー) のように男性単数形容詞変化を適用している例は、日本の地名については見られない。

一般に知名度の低い地名については、その前に jezioro, miasto, miejscowość, rzeka, wies, wyspa などの語を付加するとよい。この場合、次に来る名詞を格変化させずに提示

することで、主格形を他者に正確に伝達できる。実際この手法は以下の例に見るように頻繁に用いられている。同じ地名を2度以上用いる時は、2度目からはポーランド語の格変化として違和感のない限り、変化させても構わない。

- (7) Zimą Japonia ma Festiwal Śnieżny w Sapporo na wyspie Hokkaido, (...) Latem, w historycznej miejsowości Kamakura, gdzie znajduje się...
- (8) 53 lata temu oslepiający błysk nad japońskim miastem Hiroszima oznajmił światu początek nowej epoki w dziejach ludzkości...
- (9) Po dziesięciu latach prac konstruktorskich w Japonii otwarto wczoraj najdłuższy na świecie most wiszący, łączący miasto Kobe na wyspie Honsiu z wyspą Awadzi.

外国の地名を格変化させる条件は、Satkiewicz (1986: 248), Kochanski (1985b: 129) によれば、①ポーランド語の格変化に適用しやすいこと、②利用頻度が高いこと、の2点である。これらの条件を同時に満たす日本の地名は自ずと限られてくる。一般に前者の要素が後者に勝つことは、Bonn や Essen が不変化であることを見れば自明であろう。以下、日本の地名の実例を見ていきたい。

-a 型

- (10) W Hakubie (前) spadło ponad dwa metry świeżego sniegu...
- (11) W 3 miesiącu następnego roku sam opuścił Kioto, udając się do Nagoyi (生).
- (12) ..., których papirusowe oryginały znajdują się w Muzeum Tokugawa w Nagoi (前).
- (13) W 1844 r. od portu Haha na Okinawie (前) przybył uzbrojony okręt...
- (14) Na tej trasie zatrzymuje się (...) w Nagoya (前) i Kioto.

-a 型には格変化が適用される(10)~(13)。-a の直前が母音であっても事情は変わらない。Erytrea, Genua, Gwinea, Korea, Nicea など、こうした例は多い。格変化させていないテキストもしばしば見受けられる(14)。

ポーランド語では i の前では j は綴られない。(11) の場合、i の前が [j] であるものの表記が y なので、省略されていないものと考えられる。しかし、y を落としている表記がないわけではない(12)。

-wa は [va] と発音される。-ia という表記でも、前置格では -le となるので、

原音を保つことができない(13).

-i 型

(15) ..., pomiędzy Teramachi (造) na zachodzie i Kawaramachi (造) na wschodzie, rozciąga się...

(16) ..., bijąc rekord poprzednio uzyskany przez wielki piec w Sakai (前)...

-i 型は格変化しない(15), (16). この型で興味深いのは Nagasaki で, Dolacka (1991: 78) によると, 格変化しないこの地名を女性名詞と誤るポーランド人が少なくないらしい³⁾.

-u 型

(17) Kikuchi Kan (...) urodził się w Takamatsu (前).

(18) Warszawę z japońskim Hamamatsu (造) połączyła miłość do Fryderyka Chopina.

-u 型は格変化しない(17), (18).

-e 型

(19) Adam Kiryłowicz Laxman (...) został odesłany do Hakodate (生), a...

-e 型は格変化しない(19).

-o 型

(20) Już na początku igrzysk w Nagano (前) odnieśliśmy medalowy sukces!

-o 型は格変化しない(20). 日本以外の地名についても, 格変化の適用が容易であっても, 不変化扱いというものが多い(例: Chicago, Kolorado, Orinoko, Oslo). Kochanski (1985b: 130) はその理由をこう記している.

さらに厄介なのが -o で終わる地名についてである. このような地名が主格形の

ままに置かれることは、主格形の“解説”を難しくするような語幹の交替 (Kio-
to — w Kiocie, Sapporo — o Sapporze) が格変化の際にしばしば起こって
しまうことで説明される。

上の主張はある程度説得的ではあるものの、ではなぜ -a 型が不変化にならないの
かの説明にはなっていない。-a 型 と -o 型の地名の利用頻度の差が背景にあるので
はないかと推察されるが、現在筆者はその統計データの蒐集段階にあり、詳細は今後
の研究の進捗状況に応じ、別稿で明らかにしたい。

-n 型

(21) Śnieg przysypał także po uszy alpejczyków w Shiga Kogen (前).

(22) ...było Kioto ze swoimi tradycyjnymi wyrobami, takimi jak (...) jed-
wabie i brokaty z Nishijin (Nishijin-ori), ...

-n 型は格変化の適用が容易であるにもかかわらず、それがなかなか浸透してい
ない(21), (22)。それでも、-o 型よりは不変化の傾向が弱い (cf. Kochanski
1985b: 131)。

-n 型の最大の問題点は生格語尾であるが、これが不変化となる最大要因である
ことはまず間違いなかろう (cf. Doroszewski 1964a: 38)。Westfal (1947-48) は
子音で終わる外国の地名の生格語尾 -a/-u を考察した研究であるが、それによる
と主格が -in/-yn で終わり、しかもその直前が軟子音になっている場合は生格で
語尾 -a を (例: Debreczyn)、硬子音になっている場合は語尾 -u をとる
(例: Londyn) という。Doroszewski (1966: 451) はこの見解を概ね支持しているが、
断言することは危険だとしている。日本の地名に関しては (22) のように不変化の方
が、取り分けある程度まとまった分量のテキストを示せない場合には、誤解される恐
れは少ないであろう。

2. 人名

(23) Yoshimasa, ósmý shōgun (panował w okresie 1443-1473), pochłonięty był
życiem dworskim i ...

語末の音が何であれ、当該人物の性・数に合わせて、代名詞、形容詞・動詞等の語尾を
選択していくことになるのは云うまでもない(23)。

2. 1. 姓・名の配列

- (24) Celem, ku któremu zamierzał Yamamura Hideo, była kawiarenka w podziemiu...
- (25) Własnie dlatego autorka nie może zgodzić się ze stwierdzeniem Minobe Tatsukichiego
- (26) Premier Japonii Yasuhiro Nakasone jest miłośnikiem sztuki...
- (27) Katsusika Hokusai (1760-1849) był mistrzem japońskiego pejzażu.
- (28) Kenji Doihara jest głęboko przekonany, że...

ジャパノロジストは翻訳であるとないとを問わず日本式に「姓+名」の順で挙げているものがほとんどである(24), (25)。これに対し、非ジャパノロジストの翻訳以外のテキストでは、「名+姓」の順になっているものがほとんどである(26)。この理由としては、英語等を介在して情報を得ていることが考えられるであろう。非ジャパノロジストによる翻訳テキストでは、翻訳元のテキストが「姓+名」と「名+姓」のどちらの配列を採用しているか、翻訳者がどれだけ日本の事情を調べているか、専門家の助言を得ているかなどにより、姓・名の配列にちがいが出て来ているようである(27), (28)。

ポーランドでも我国同様、名のような姓をもつ者がいる⁴⁾。こうした現実を反映したものと思われるが、学術論文などでは姓を大文字で記しているものもある(29)。しかしこれとても各論文の筆者の姓についてであり、姓を大文字で記すことが一般に浸透・普及しているということではない。

- (29) Witold ANDRUSZKIEWICZ

HOLOCAUST W EJSZYSZKACH

Bezpośrednim bodźcem do napisania niniejszego opracowania był...

以上から、但書なしに日本事情に疎い一般のポーランド人を読者にポーランド文を記す場合は、「名+姓」の順で挙げる方が誤解される恐れが低いということになろう。Doroszewski (1968: 509) は、ハンガリー人の姓名はポーランド人のそれとは逆の配列になるが、ポーランド語テキストにあっては「名+姓」の順で示すべきだとしているが、この指摘は我々にとっても参考になるだろう。

姓名を日本式で提示するにあいには、「日本式にならって、姓が名に先行するものとする。例えば、Hoshi (星) は姓であり、Shin'ichi (新一) は名である」(Japonica,

nr 1, 1993, s. 10) のような但書がない限りは、誤解は避け得ないものと覚悟すべきであろう。

2. 2. 性別の伝達

日本人の名であっても、時にその人物の性別を判断しかねる場合があるが、普通はさほど大きな障害にはならないように思う。しかし、ポーランド語で記す場合には、人物の性別を正しく伝達しておかなければ、代名詞、形容詞・動詞等の語尾の一部の決定に直接的な影響が出てくる。

日本人の性別の判断を誤ったと思われるようなポーランド語テキストを筆者は実際に見出したわけではないが、-a で終わる男性名や、-n または -i で終わる女性名は誤解される恐れが大きいものと考えられる。

(30) Katsuyoshi Watanabe sygnalizując w 111 numerze „Zeszytów Historycznych” ukazanie się „Historii Polski” po fińsku, napisanej przez prof. Kalervo Hoviego, wspomina również...

(30) は専門誌の「編集部への手紙」(LISTY DO REDAKCJI) 欄に掲載されたものであるが、投稿者は記述内容からでは筆者(渡辺)の性別に確信が持てなかったために、意図的に Pan Katsuyoshi Watanabe や wspomniał という表現を避けたものと推察される(この種の投稿で敬称を伴わないものは稀である)。

(31) Stosunki te są jednak bardzo słabo badane, na co na przykład zwrócił ostatnio uwagę japoński historyk Katsuyoshi Watanabe.

historyk には女性形がない。従って、(31)の訳者が拙文の筆者を女性と判断したならば、テキストは „... zwróciła... japońska historyk” になったはずである。(31)のオリジナル・テキストは次の通りである。

(32) Näille suhteille on kuvaavaa se, että niiden tutkimuksen vähyyteen kiinnitti huomiota japanilainen tutkija Katsuyoshi Watanabe.

フィンランド語は日本語以上に男女のちがいを示す指標に乏しく、japanilainen tutkija では当該人物の性別はまったく分からない。(31)の訳者がジャパノロジスト等に助言を求めたか、あるいは一種の“賭け”を試みて、japoński historyk と訳したも

のと思われる。

Doroszewski & Kurkowska (1981 : 384) は、いみじくもこう記している。

男性と同形の姓を女性に用いてもよいのは、問題の人物の性別を充分明らかにできるだけの要素が直前直後のコンテキストに現れる場合に限られる（例えば、フルネームを挙げたり、肩書を完全に記すことである。mgr A. Kowal という形では、当該人物の性別についての情報がない。曖昧さを回避するために、mgr Anna Kowal とか mgr Adam Kowal のように記すべきであろう。

-owa, -ówna, -ska, -cka, -dzka などのような性別を示すような要素が皆無の日本人の姓にあっては、こうした指摘は傾聴に値しよう。

2. 3. 姓の格変化

a). 男性の場合

名、称号等が姓に先行している場合は、姓は格変化させてもさせなくてもよいされる。従って、Napoleon Bonaparte の生格は Napoleona Bonapartego あるいは Napoleona Bonaparte に、konsul Bonaparte の生格は konsula Bonapartego または konsula Bonaparte になる (Grzenia 1998 : 65)。日本人の姓についてはこの場合不変化になっていることが多い(33)。

(33) Dzisiaj w Tokio będzie rozmawiać z premierem Japonii Ryutaro Hashimoto, a jutro spotka się z cesarzem Akihito.

(34) Spotkałam także pana profesora Keizo Haiya z Uniwersytetu Hokkaido.

-a 型

(35) W 1976 r. objął w rządzie Takeo Fukudy (生) tekę ministra Edukacji...

(36) Trzeba powiedzieć, że „cesarz kina japońskiego” — jak nazywają Kurosawę (対) — kiedy go...

-a 型は格変化する(35), (36)。

-i 型

- (37) ... ostrzega starego Eguchiego (対) kobieta z hotelu.
(38) Pańska prosba, abym napisał kilka słów o Mizoguchim (前) sprawiła mi przyjemność.
(39) Twórczość Ozaki (生) Kōyō, zaliczona w zasadzie do...
(40) Następnym utworem był wiersz Ochiaia (生) Naobumiego...

-i 型は形容詞変化をする(37), (38). しかし, 不変化の例がないわけではない(39). 男性名詞軟変化を適用しているものがあるが(40), これはハンガリー人の姓 Jókai が次のように変化することから説明できよう (cf. Doroszewski & Kurkowska 1981 : 233; Kochanski 1985a : 108).

主 格 Jókai
生 格 Jókaia または Jókaiego
与 格 Jókaiowi または Jókaiemu
対 格 Jókai a または Jókai ego
造 格 Jókai em または Jókai m
前置格 Jókai u または Jókai m
呼 格 Jókai u! または Jókai !

従って, (40) は Ochiaiego としても差し支えない. ただし, Ochiaia にしろ Ochiaiego にしろ, ポーランド語としては異常に母音過多になっていることは認めなければならぬ (cf. Breza 1991).

-u 型

-u 型については, ポーランド人の姓に雛型を求めるからして難しく, ドイツ系の姓, 例えば Landau, に例があるだけである. 格変化は次の通りである.

主 格 Landau
生 格 Landaua
与 格 Landauowi
対 格 Landaua
造 格 Landauem

前置格 Landau

呼 格 Landau!

-au の u は実際には [ɨ] のように発音されるため、上のような格変化になるわけであるが、注目したいのは前置格と呼格である。会話では前置格は Landale となるが、綴字としては不可である。このため主格で代用されているのであるが、呼格についても事情は同じである (Satkiewicz 1986 : 233)。

では、日本人の姓への適用はどうなるであろうか。-au 型の姓は少数であろうが、-ou 型は多い。しかし、実際には「近藤」、「佐藤」、「遠藤」などの姓は、表記の上では -o または -ō となっていることが普通である。仮に -au 型や -ou 型の姓があったとしても、ポーランド人にとって比較的なじみのある Landau ですら格変化に問題があることを考えれば、不変化扱いとするのが当然であろう。

以下に挙げる例も不変化扱いになっている。

- (41) W południe Tadeusz Mazowiecki wydał na czesc Toshiki Kaifu (生)
i jego małżonki oficjalne śniadanie.

-e 型

-e 型は基本的には形容詞変化を適用できる。例えば、Dante は次のように格変化する。

主 格 Dante
生 格 Dantego
与 格 Dantemu
対 格 Dantego
造 格 Dantem
前置格 Dantem
呼 格 Dante!

上に見るように、造格と前置格で形容詞変化と異なっている。Grzenia (1998 : 65) は、-e 型については不変化も可としている。

-e 型の日本人の姓に Dante 型の変化を適用している例は見当たらない。

- (42) Prasa również publikowała utwory ambitne, m.in. psychologiczne

powiesci Natsume (生) Sōseki.

-o 型

-o で終わる外国人の姓は格変化させることが原則である。

主 格	Piccaso	Makarenko	Franco
生 格	Picassa	Makarenki	Franco
与 格	Picassowi	Makarence	Franco
対 格	Picassa	Makarenkę	Franco
造 格	Picasse	Makarenką	Franco
前置格	Picassie	Makarence	Franco
呼 格	Picasso!	Makarenko!	Franco!

一般には Picasso 型になる。Makarenko 型には他のスラヴ系言語の -o で終わる姓が入るが、Avogadro のような非スラヴ系の姓でこれに属すものもある。Franco 型に入る姓には Brando, Cartro, Eco などがあるが、Picasso 型と Franco 型の境界線に働くのが何であるのかは特定しがたい。

(43) Konkluzję upadku rolnictwa japońskiego i emigracji do miast obserwujemy w niejednym filmie Shindo (生)。

(44) Taką konkluzję zawierają zwłaszcza materiały dwóch „asów” japońskiego Drugiego Wydziału w Europie: (...) i generała Okamota (生) Suemasy,...

日本人の -o 型の姓の大多数が Franco 型であるが(43), Picasso 型になっている場合がないわけではない(44)。

-n 型

(45) W zaleceniach dla wiernych Shinran wyszedł daleko poza wskazania mistrza Hōnen (生)。

日本人にはこの型の姓は多くない。筆者は現段階ではしかるべき例を見いだしていないが、(45) を基に推察するに、格変化の適用が自然であると考えられる。

ところで、-en で終わるような姓（例：Sen（千））では所謂“動く e”（e ruch-me）を考慮する必要があるのであろうか。Doroszewski & Kurkowska（1981：382）によれば、外国人の姓でそのような可能性があるのは -el で終わるすべてと、ごく一部のポーランド人になじみの -er で終わる姓（例：Luter, Lutra（生）, Lutrowi（与）...）に限られるようだ。従って、日本人の姓については“動く e”は考慮する必要がないであろう。

b). 女性の場合

-a 型

- (46) Kierując się tą myślą, Kanetaka rozpoczęła swój cotygodniowy półgodzinny program pt. „Kanetaka Kaoru Sekai no Tabi” (Podróże po świecie Kaoru Kanetaki (生)).

-a 型は格変化する(46).

-a 型以外

- (47) ...powiedziała: „Wygląda na to, że w czasie swej półrocznej nieobecności Ayako dojrzała jako człowiek”. Następna próba sił Okamoto (生)?

-a 型以外では、ポーランド人の姓も含め、一切変化しない(47). Grzenia（1998：64）は、極端な例として Oglądałem film Holland z Braunek. Sprawę Nowak przekazano Karłowicz. を挙げ、名、敬称、称号などと用いるか、古風な手法ではあるが -owa, -ówna などと用い、Oglądałem film Agnieszki Holland z Małgorzatą Braunek. Sprawę pani Nowakowej przekazano magister Karłowicz. などとすることが望ましいとしている。-owa, -ówna を日本人の姓に適用することには一考を要すが、我々の姓にとっても示唆的である。

2. 4. 名の格変化

a). 男性の場合

-a 型

(48) ...a także Tokutomiego Roki (生) opowieść o Namiko...

(49) Tokimase (対) uważa się za pierwszego shikkena z dynastii Hōjō, ...

-a 型は女性名詞と同じ格変化をする(48), (49).

-i 型

(50) W rozkazie Hideyoshiego (生) na temat likwidacji broni u chłopców znajdowało się...

(51) W srode wieści o Taguchim Umpeiu (前) rozeszły się po całym biurze.

(52) Prasa również publikowała utwory ambitne, m.in. psychologiczne powieści Natsume Sōseki(生).

-i 型でもっとも一般的と思われるのが形容詞変化するものである(50). (51) は Jōkai 型に合わせたものと思われるが、ポーランド人の男性名 Antoni, Jerzy, Konstanty などが形容詞変化することから、最良の格変化とは認められないであろう。同様の理由から、(52) も理想的な形とは思われない。

-u 型

(53) Doskonałym przykładem rozwoju i przemian kinematografii japońskiej była działalność Ozu (生) Yasujiro.

-u 型は格変化しない(53).

-e 型

(54) Miał wtedy okazję poznać Akutagawę Ryunosuke i Shige Naoye.

Jorge, Cezare など形容詞変化する一部を除けば、-e 型の外国人の名は一般に不変化扱いとなる (cf. Grzenia 1998 : 61). 日本人の名も例外ではない(54).

-o 型

(55) ... odbyły się rozmowy ministrów spraw zagranicznych obu państw
Krzysztofa Skubiszewskiego i Taro Nakayamy.

-o 型は格変化しない(55).

ポーランド語では Kazimierz の愛称 Kazio, Jan の愛称 Jasio などのように -o で終わり格変化する例がある. こうした愛称形を除けば, Bruno, Iwo, Hugo のような名しかなく, しかもこれらは Brunona (生), Brunonowi (与)... と特殊な変化をする. また, Grzenia (1998 : 61) は, Bernardo, Pietro, Tomasoなどを例に挙げ, Bernarda (生), Bernardowi (与)... のように格変化させるべきだと主張するが, これらはポーランド人に対応する名が存在する事例である. いずれも, 日本人の名に適用することは難しい.

Grzenia (1998 : 313), Satkiewicz (1986 : 236) によれば, Romeo の格変化は次の通りである.

主 格 Romeo
生 格 Romea
与 格 Romeowi
対 格 Romea
造 格 Romeem
前置格 Romeo
呼 格 Romeo!

Doroszewski (1964b : 231-232) は, 「母音 + o」で終わる語に対応する格変化がポーランド語にはないことを理由に, 前置格では主格でもって代用しなければならない「必然性」を説いている. 日本人の名にはまさに「母音 + o」型が少ない. Kazuo, Haruo, Yasuo などに格変化を適用するとなれば, Romeo の場合同様, 前置格と呼格は主格と同形にしなければならないであろう.

-n 型

(56) Wśród ciekawych osobowosci związanych z Shushi-gaku należy wymienić
Kaibare Ekkena (対).

-n 型は格変化する(56).

b). 女性の場合

-a 型

最近でこそ「美香」「綾加」などのような -a 型はポピュラーであるが、加藤 (1987: 162) によれば、-ko (ほとんどの場合、「子」と書かれる) で終わる女性名は1912-63年までの半世紀以上の間命名の一位を飾っていた。現在でも -ko 型が根強い人気を誇っていることは周知の通りである。こうした“異常な”頻度差故にか、筆者は -a 型のサンプルを実際のポーランド語テキストから未だに抽出できていない。しかし、-a 型が格変化することは確実である (cf. Grzenia 1998: 61).

-a 型以外

(57) Cztery dni przed spotkaniem z Yoshioką Mitsu (造)...

(58) Bycie „jedną z nich” wydaje się stanowić nie przewodnią jej działania, które oprócz „Pokoju Tetsuko (生)” i dwóch...

(57), (58) の例に限らず、-a 型以外では一切格変化するしない。

2. 5. 呼格

(59) — Panie Onodera (呼) — Tatsuno podszedł od strony rufy...

呼格は主格で代用される傾向があり、生・与・対・造・前置格で格変化を適用していても、呼格では主格と同形になっていることがほとんどである(59)。しかし、これは奇異なことではなく、とりわけ敬称を伴う場合にはその傾向が強く、Panie Adamczyk! の方が Panie Adamczyk! よりも自然に響くと云われる (cf. Doroszewski 1962: 746-747; tenze 1968: 498-499).

2. 6. 複数形

外国人の姓にあっては、panstwo や bracia などを用いて表現されることが普通で、その際には姓は格変化させてもさせなくてもよいとされる (Grzenia 1998 : 70-71).

Clinton → Clintonowie, panstwo Clinton, panstwo Clintonowie

Grimm → Grimmowie, bracia Grimm, bracia Grimmowie

複数主格は単数での変化の形によらず、すべて -owie となる。-e 型は複数では形容詞変化しない。また、-i 型は主・呼格以外では形容詞変化する。

主 格	Dantowie	Pucciniowie
生 格	Dantów	Puccinich
与 格	Dantom	Puccinim
対 格	Dantów	Puccinich
造 格	Dantami	Puccinimi
前置格	Dantach	Puccinich
呼 格	Dantowie!	Pucciniowie!

以上を基に、Yamada (山田), Yamaguchi (山口), Ochiai (落合), Komatsu (小松), Hirose (広瀬), Kaneko (金子), Daimon (大門) の格変化を“予想”すると次のようになるであろう。

主 格	Yamadowie	Yamaguchiowie	Ochiaiowie		Komatsu
生 格	Yamadów	Yamguchich	Ochiaiów	/ Ochiaich	Komatsu
与 格	Yamadom	Yamaguchim	Ochiaiom	/ Ochiaim	Komatsu
対 格	Yamadów	Yamguchich	Ochiaiów	/ Ochiaich	Komatsu
造 格	Yamadami	Yamaguchimi	Ochiaiami	/ Ochiaimi	Komatsu
前置格	Yamadach	Yamaguchich	Ochiaiach	/ Ochiaich	Komatsu
呼 格	Yamadowie!	Yamaguchiowie!	Ochiaiowie!		Komatsu!

主 格	Hirosowie	Kaneko	Daimonowie
生 格	Hirosów	Kaneko	Daimonów
与 格	Hirosom	Kaneko	Daimonom
対 格	Hirosów	Kaneko	Daimonów

造 格 Hirosami Kaneko Daimonami
 前置格 Hirosach Kaneko Daimonach
 呼 格 Hirosowie! Kaneko! Daimonowie!

女性の場合の複数形は -a 型のみが格変化の対象となるが、実際に用いられることはない (Kochanski 1985a : 113).

主 格 Yamady
 生 格 Yamad
 与 格 Yamadom
 対 格 Yamady
 造 格 Yamadami
 前置格 Yamadach
 呼 格 Yamady!

では、実例を幾つか見てみよう.

(60) *Hegemonia rodu Hōjō ustaliła się...*

(61) *Tu jest list do Uedów (...) a tu do Watanabów.*

(62) *Wreszcie, (...) Josinobu – ostatni siogun z rodu Tokugawów – został zmuszony do ustąpienia.*

結びに代えて

ポーランド語の名詞は格変化させてあってこそ自然な姿である。不変化の方針を貫いたテキストには不自然さが付きまとう。かつて Doroszewski は *prezydent Kennedy* の生格で *Kennedy* の部分も変化させるべきかと問われて、格変化の適用を説き、外国の地名・人名はすべて不変化にしようとする傾向に警鐘を鳴らした。Doroszewski は同時に格変化を適用しても、主格形を伝達させることの重要性を強調するが (Doroszewski 1964a : 38), 至言である。斜格で、しかも一度しかテキストに現れず、しかも格変化していれば、主格形を正しく導けない場合が出てくる。実はこのことはポーランド人の姓についても当てはまる場合がある。Znam pana Kapustę. では、知っている相手の姓が *Kapusta* なのか *Kapusto* なのか分からない (どちらの姓も実在する)。Dudkówna では父親の姓が *Dudek* なのか *Dudko* なのか *Dudka* なのか分からないのである (すべて実在の姓)。

日本の地名や邦人の姓名のポーランド語テキスト中の格変化については、ガイドラインにあたるものが確立されており、基本的には個人の感覚に支配されている。つまり、恣意的である。もし一定量のテキストが示せず、索引も註も施せないような場合には、多少不自然ではあっても不変化の方針を採るのもやむを得ないであろう。すなわち、これは“必要悪”である。もっとも、これですべて問題が解決される保証はなく、例えば Znam Hatta (不変化・対格) のような文章では、知っている相手が八田という人物であることをこれだけでは特定することができない。人名にあつては、さらに姓・名の区別、性別の指標を与えるなどの何らかの表現上の工夫をすることが望ましいと云えるであろう。

註

- 1). この問題については、Struminski (1955), Szewczyk & Ratajski (1957) を参照のこと。ただし、日本関連に記述については誤認している点が少なくない。
- 2). -n 型については若干検討の余地がある。カナダの Edmonton には約3万人のポーランド系が住むが、この地名を格変化させる住民とさせない住民とがいるという。前者はこれを男性名詞として扱い *ten nasz Edmonton* のようにいい、後者は中性名詞として扱い *to nasze Edmonton* のように表現しているらしい (Kucała 1990)。
- 3). Dolacka は誤文のサンプルとして次を挙げている。

— Podczas osmiodniowej wizyty delegacja odwiedzi Hiroszimę, †Nagasaki, Kioto i kilka innych miast.

— Tematem filmu były atomowe eksplozje w Hiroszynie i w †Nagasaki.

- 4). ポーランドでは、姓が ①滑稽であったり、人の尊厳を傷つけるようなものである場合、②非ポーランド的な場合、③名として認められるものが姓になっている場合、改姓が許可される場合がある (Dziennik Ustaw nr 59 z 1963 r., poz. 328)。

参考文献

Edward Breza 1991, Konstrukcja nietypowego połączenia samogłoska + samogłoska w języku polskim, Język Polski, z. 3-5.

Maria Dolacka 1991, Z fleksją na ty [w:] Polszczyzna płatna nam figle. Poradnik językowy dla każdego, pod red. Jerzego Podrackiego, Warszawa.

Witold Doroszewski 1961, O kulturę słowa. Poradnik językowy, t. I, Warszawa.

Witold Doroszewski 1964a, Formy obcych nazwisk i nazw miejscowości, Poradnik

Językowy, z. 1.

Witold Doroszewski 1964b, Romeo — Romea, Poradnik Językowy, z. 5.

Witold Doroszewski 1966, Wśród słów, wyrażen i mysli. Refleksje o języku polskim, Warszawa.

Witold Doroszewski 1968, O kulturę słowa, Poradnik językowy, t. II, Warszawa.

Witold Doroszewski & Halina Kurkowska 1981, Słownik poprawnej plszczyzny PWN, Warszawa.

Antonina Grybosiowa 1978, Nieodmiennosc imion typu ALDO, FRANCESCO w języku prasy, radia i telewizji, Poradnik Językowy, z. 9.

Jan Grzenia 1998, Słownik nazw własnych, Warszawa.

Witold Kochanski 1985a, Odmiana rzeczowników własnych osobowych [w:] Barbara Klebanowska, Witold Kochanski, Andrzej Markowski, O dobrej i złej polszczyźnie, Warszawa.

Witold Kochanski 1985b, Odmiana nazw geograficznych [w:] Barbara Klebanowska, Witold Kochanski, Andrzej Markowski, O dobrej i złej polszczyźnie, Warszawa.

Wiesław Kotanski 1945, Japonskie wyrazy w języku polskim, Język Polski, z. 6.

Bogusław Kreja 1995, Językowe i poza językowe przyczyny nieodmiennosci polskich nazwisk, Język Polski, z. 1.

Marian Kucała 1990, Odpowiedzi redakcji, Język Polski, z. 5.

Zofia Kurzowa 1966, Nieodmiennosc i odmiana nazwisk na -o w języku plskim, Język Polski, z. 5.

Zofia Kurzowa 1967, Jeszcze przykład nieodmiennosci nazwisk, Język Polski, z. 2.

Witold Manczak 1967, Odmiana nazwisk na -o, Język Polski, z. 4.

Andrzej Markowski 1972a, Odmiana nazwisk we współczesnej polszczyźnie. I. Nazwiska mężczyzn zakonczone na -o lub z alternacją głoskową w temacie, Poradnik Językowy, z. 6.

Andrzej Markowski 1972b, Odmiana nazwisk we współczesnej polszczyźnie. II. Nazwiska kobiet, Poradnik Językowy, z. 7.

Andrzej Markowski 1972c, Odmiana nazwisk we współczesnej polszczyźnie. III. Nazwiska używane w liczbie mnogiej, Poradnik Językowy, z. 8.

Eugeniusz Mroczo 1958, Wymowa, pisownia, transkrypcja i odmiana nazwisk węgierskich w języku polskim, Poradnik Językowy, z. 9.

Antonina Obrebska-Jablonska 1958, Na manowcach odmiany nazwisk męskich na -o, Język Polski, z. 5.

Aldona Skudrzykowa 1996, Nazwiska żeńskie z przyrostkiem -owa we współczesnej

- polszczyźnie ogólnej, Jezyk Polski, z. 1.
- Bohdan Struminski 1955, O pisowni obcych nazw geograficznych, Poradnik Językowy, z. 2.
- Józef Szafran 1930, Niektóre imiona własne osób z końcem <o> bez odmiany, Poradnik Językowy, z. 2.
- Janina Szewczyk & Lech Ratajski 1957, Prace Instytutu Geografii PAN nad spolszczeniem nazw geograficznych, Poradnik Językowy, z. 3.
- Mieczysław Szymczak 1980, Odmienność i nieodmienność nazwisk, Poradnik Językowy, z. 7.
- Stanisław Westfal 1947-48, The Genetives: LONDYNU, GLASGOWA and EDYNBURGA in Modern Polish, The Slavonic and East European Review, vol. 26.
- Maria Zarebina 1967, W sprawie nieodmienności nazw własnych, Jezyk Polski, z. 2.
- 加藤秀俊 1987, 「名前でたどる80年史」『日本全国苗字と名前』(恒友出版)
- 渡辺克義 1992, 『ポーランド語作文研究』(泰流社)

引用文例出典一覧

- (1) Wiesław Kotanski, Religie Japonii [w:] Zarys dziejów religii, Warszawa 1988, s. 133.
- (2) Michał Derenicz, Japonia — Nippon, Warszawa 1977, s. 133.
- (3) Zofia Alberowa, O sztuce Japonii, Warszawa 1983, s. 113.
- (4) Kotanski, op. cit., s. 140.
- (5) Jolanta Tubielewicz, Historia Japonii, Warszawa 1984, s. 163.
- (6) Vlasta Hilska, Dzieje i kultura narodu japońskiego. Krótki zarys, przeł. z czeskiego Stanisław Gawłowski, Warszawa 1957, s. 265.
- (7) Życie Warszawy, 30 VIII 1998 r.
- (8) Tamże, 7 VIII 1998 r.
- (9) Tamże, 6 IV 1998 r.
- (10) Tamże, 19 II 1998 r.
- (11) Tubielewicz, Historia Japonii, s. 241.
- (12) Życie Warszawy, 22 IV 1998 r.
- (13) Antoni Wolny, Okinawa 1945, Warszawa 1983, s. 6.
- (14) Olgierd Budrewicz, Tokijskie ABC, Warszawa 1970, s. 160.
- (15) Jolanta Tubielewicz, Nara i Kioto, Warszawa 1983, s. 126.
- (16) Robert Guillain, Japonia — trzecie mocarstwo, przeł. z francuskiego Adam

Galica, Warszawa 1972, s. 206.

- (17) Mikołaj Melanowicz, Literatura japońska, t. II, Warszawa 1994, s. 119.
- (18) Życie Warszawy, 12 III 1998 r.
- (19) Tubielewicz, Historia Japonii, s. 325.
- (20) Życie Warszawy, 9 II 1998 r.
- (21) Tamże, 10 II 1998 r.
- (22) Tubielewicz, Historia Japonii, s. 279.
- (23) John Whitney Hall, Japonia od czasów najdawniejszych do dzisiaj, przeł. z angielskiego Krystyna Czyżewska-Madajewicz, Warszawa 1979, s. 99.
- (24) Junnosuke Yoshiyuki, Ulewa, przeł. z japońskiego Krystyna Okazaki [w:] Tydzien świętego mozołu. Opowiadania japońskie 1945-1975, Warszawa 1986, s. 466.
- (25) Ewa Pałasz-Rutkowska, "Wyjątkowa" pozycja monarchy Japonii nakreślona przez konstytucję Meiji – studium porównawcze, Japonica, nr 2, 1994, s. 34.
- (26) Trybuna Ludu, 14 I 1987 r.
- (27) Vlasta Hilska, op. cit., s. 258.
- (28) Lew Smirnow & Jewgienij Zajcew, Przed tokijskim trybunałem, przeł. z rosyjskiego Teofil Lesko, Warszawa 1983, s. 114.
- (29) Witold Andruszkiewicz, Holocaust w Ejszyszkach, Zeszyty Historyczne, nr 120, 1997, s. 83.
- (30) Andrzej Bogusławski, Uwagi krytyczne o książce Tadeusza Ciesłaka „Historia Finlandii”, Zeszyty Historyczne, nr 113, 1995, s. 236.
- (31) Raimo Pullat, Stosunki polsko-fińskie w okresie międzywojennym, przeł. z fińskiego, Magdalena Galinska, Warszawa 1998, s. 7.
- (32) Raimo Pullat, Suomi ja Puola. Suhteita yli Itämeren 1917-1941, Helsinki, 1997, s. 9.
- (33) Życie Warszawy, 12 II 1998 r.
- (34) Barbara Bartnicka, Polonistyka i slawistyka na Uniwersytecie Tokijskim, Poradnik Językowy, z. 7, 1979, s. 339.
- (35) Trybuna Ludu, 1 VII 1994.
- (36) Max Tessier, KAGEMUSHA, przeł. z francuskiego Ireneusz Dembowski, Film na świecie, nr 5-6, 1981, s. 56.
- (37) Yasunari Kawabata, Tysiąc zurawi. Śpiące piękności, przeł. z japońskiego Mikołaj Melanowicz, Warszawa 1987, s. 183.
- (38) Yoshikata Yoda, Wspomnienia o Mizoguchim, przeł. z francuskiego Ireneusz

- Dembowski, Film na świecie, nr 345-346, s. 6.
- (39) Melanowicz, Literatura japońska, t. II, s. 411.
- (40) Ewa Pałasz-Rutkowska & Andrzej Romer, Historia stosunków polsko-japońskich 1904-1945, Warszawa 1996, s. 19.
- (41) Słowo Powszechne, 16 I 1990 r.
- (42) Melanowicz, Literatura japońska, t. II, s. 411.
- (43) Stanisław Janicki, Film japoński, Warszawa 1982, s. 210.
- (44) Robert Guillain, Od Pearl Harbour do Hirosimy. Japonia w latach wojny, przeł. z francuskiego Adam Galica, Warszawa 1983, s. 149.
- (45) Tubielewicz, Historia Japonii, s. 174.
- (46) Wiadomości z Japonii, nr 4, 1993 r., s. 6.
- (47) Tamże, nr 2, 1987 r., s. 7.
- (48) Melanowicz, Literatura japońska, t. II, s. 411.
- (49) Tubielewicz, Historia Japonii, s. 162.
- (50) Achmed Iskenderow, Toyotomi Hideyoshi, przeł. z rosyjskiego Ewa Szulc, Warszawa 1991, s. 192.
- (51) Senji Kuroi, Tydzien świętego mozołu, przeł. Andrzej Nowak [w:] Tydzien świętego mozołu. Opowiadania japońskie 1945-1975, s. 205.
- (52) Melanowicz, Literatura japońska, t. II, s. 411.
- (53) Ewa Malinowska, Filmowa twórczość Ozu Yasujiro, Przegląd Orientalistyczny, nr 4, 1988, s. 329.
- (54) Mikołaj Melanowicz, Literatura japońska, t. III, Warszawa 1996, s. 83.
- (55) Słowo Powszechne, 16 I 1990 r.
- (56) Tubielewicz, Historia Japonii, s. 300.
- (57) Shusaku Endo, Kobieta, którą porzuciłem, przeł. z japońskiego Izabela Denysenko, Warszawa 1978, s. 96.
- (58) Wiadomości z Japonii, nr 4, 1985 r., s. 6.
- (59) Sakyo Komatsu, Zatonięcie Japonii, przeł. z japońskiego Mikołaj Melanowicz, Poznań 1989, s. 21.
- (60) Tubielewicz, Historia Japonii, s. 163.
- (61) Janina Rubach-Kuczeńska, Życie po japońsku, Warszawa 1983, s. 158.
- (62) Alberowa, op. cit., s. 170.

追記 本稿は、1998年度日本ロシア文学会研究発表会（1998年10月24日、於東京大学）での筆者の同名タイトルの報告を基に作成したものである。報告の席上、元多摩美

術大学教授・現ポーランド文学者工藤幸雄氏，ワルシャワ大学 Romuald Huszcza 助教授，司会を担当された東京外国語大学・石井哲士朗助教授から貴重な質問並びに助言を賜った。また，執筆の段階で岡山大学・田口雅弘助教授から資料の提供を受けた。記して各位に謝意を表す次第である。

Some Remarks on the Declension of Japanese Geographical and Personal Names in the Polish Language

Katsuyoshi WATANABE

In this paper the author discusses how to decline Japanese geographical and personal names in Polish. They must, in principle, be declined just the same as common Polish words. However, some rarely change themselves, for example words with endings like -u, -e, and -o. Words with the ending -a are declined the most easily in Polish texts. If geographical names end in the letter -n, they remain in all cases unchanged, because we aren't sure which ending is proper, -a or -u in the genetive case.

The most important factor is to give information about the nominative case. If it is difficult to guess from the text what each word is in the nominative case, we should give Japanese proper names in unchanged forms.